

時期について、その多くの期間を初代総長として務めた渋沢元治の努力を交えながら、紹介していきたいと思います。なお記述の都合上、本文中の敬称を略しています。また「澁澤元治」が正しい名前ですが、ここでは一部の名称を除いて「渋沢元治」の表記に統一しました。

## 一 「名帝大けふ誕生」

### ◆総合大学への道

名古屋に総合大学を招致しようという動きは、一九一八（大正七）年ごろから本格的にはじまりました。それまで官立（現在の国立）の帝国大学しか認めていなかった大学枠を緩和する大学令が施行されたことが大きな要因でした。この時期の日本は、第一次世界大戦による好景気もあって、都市に人が多く集まり、従来の市街地の周りに新市街地ができ、都市空間が飛躍的に拡大していきました。そこにサラリーマンなどの都市中間層が居住し、彼らや彼らが働く企業を中心として教育への要求が高まり、それに対応した教育諸政策が実施されましたが、大学令の制定もその一つでした。



【図1】1939年 名古屋帝国大学になる直前の名古屋医科大学  
(付属図書館医学部分館提供)

当初この地域では、愛知県立医学専門学校（名古屋大学医学部の前身校）を官立大学に昇格移管することをめざしていました。はじめから帝国大学のような総合大学をめざしていたのではなく、まずは官立の医科大学⇨単科大学を設置することからはじまったのです。愛知県会の意見書採択にはじまり、職員・在校生や校友会・同窓会を中心に、一般市民の賛同を得るため新聞界などをも巻き込んで昇格移管運動が展開されました。この間、県費から百万円を政府に寄付するので官立にしてほしいという要求もおこなわれましたが、結局政府に拒否されてしまいました。そして県立のまま一九二〇（大正九）年に、この地域における初めての大学⇨愛知医科大学が設置されました。

つぎの総合大学設置運動は一九二六（大正一五）年末頃から、この愛知医科大学を中心としておこります。翌年二月、医科（愛知医科大学からの移管を予定）と工科からなる総合大学の設立をめざす「名古屋総合大学期成同盟会」

が発足しました。同盟会は政府へ陳情するほか、衆議院・名古屋市会・愛知県会へ働きかけ、意見書を建議させたりしましたが、それ以降行き詰まり、運動は停滞しました。一九三〇（昭和五）年大阪に官立総合大学（大阪帝国大学）を創設する計画が伝えられると、この地域においても、総合大学ではありませんが、愛知医科大学を官立移管する方向で運動が再開されました。そして県が国に毎年五万円を寄付することを条件に、翌一九三一（昭和六）年官立移管が実現しました（官立名古屋医科大学）。あとは「総合大学設置」Ⅱ「名古屋帝国大学設置」だけが最後に残された課題となりました。

田村春吉が名古屋医科大学の学長に就任すると、ただちに総合大学の創設が急務であると提言、具体案として、名古屋医科大学を基にした医学部と、戦時下で軍用技術の優先ということもあつて理学部・工学部を加えた、三学部からなる総合大学創設案を策定しました。これをもとに各方面に働きかけがなされ、また世論の喚起もおこなわれました。県知事が博物館を建設すると発言したことに對して、田村学長は博物館より大学設置をと切り返したこともあつたほどです。一九三八（昭和一三）年七月には名古屋総合大学設置期同盟会も発足しました。その後文部省大蔵省との折衝ほか紆余曲折を経た後、翌年二月に衆議院議会で、創設費用九百万円を愛知県が政府に納入寄付することを条件に、同年四月に医学部と理工学部の二学部からなる名古屋帝国大学が創設されることが、決議されました。





【図3】1943年 前首相近衛文麿の直筆の書「以和為貴」を掲げた総長室の渋沢

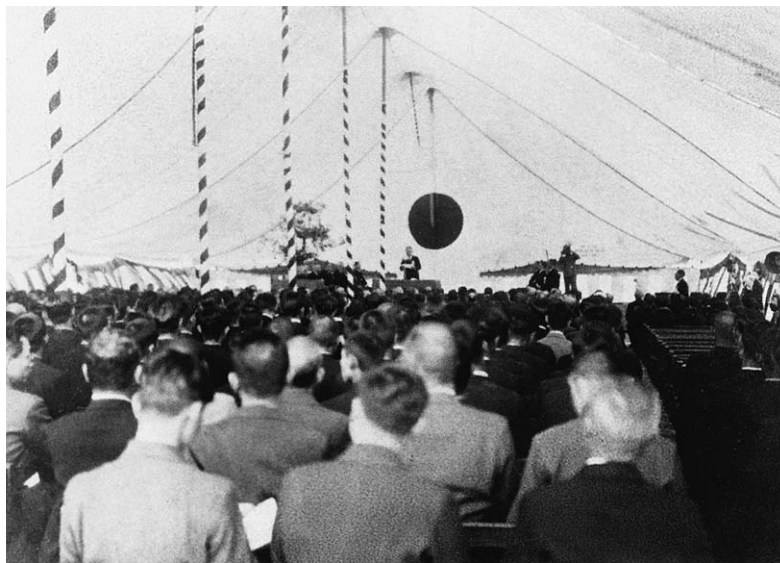
が、結局人選は文部省や設立準備調査会委員中心に進められ、最終的に創立直前の一九三九（昭和一四）年二月末に元東京帝国大学工学部長の渋沢元治に決定しました。

#### ◆創立記念日と開学式

一九三九（昭和一四）年四月一・二日の各新聞には「名帝大けふ誕生」などの見出しが踊っています。三月三十一日名古屋帝国大学官制が公布され、翌一日から実施されたためです。「非常時総長」とも新聞に書かれた渋沢は、三日名古屋に入っています。その際の抱負として、一

般論としては人材の要請をあげる一方で、実際の課題としては、建設経費の確保と理工学部の開設準備を繰り返し述べていきます。第二章で述べるように、この時期の渋沢の思いはここに率直に表現されています。

四月一四日の入学式では、医学部のみの新入生約八十名に対し、総長告辞を述べています。渋沢はここで、教育とは外



【図4】1943年 開学式（5月、永田直明氏提供）

から詰め込むことではなく人を啓発することであり、ことに大学はこれに力をそぐべきであると述べています。また教育勅語にふれる一方で、イギリス・ドイツ・アメリカの教育も平等に評価しています。このあたりに渋沢の当時の考え方をうかがいしることができます。

五月二八日には名古屋商工会議所で、医学部学友会主催の名古屋帝国大学創立祝賀会が開催されていますが、まだこの時期は医学部があるだけです。理工学部が発足した翌年五月一日に名古屋帝国大学としての第一回創立記念式を行っています。創立記念日を五月一日にしたのは、前身の名古屋医科大学がこの日を開学記念日としていたからです。なおこ

れを機に、洪沢の座右の銘である「以和為貴」（聖徳太子の十七条憲法の第一条）の書を総長室の額として掲げ、大学全体の座右の銘としました。

開学四年後の一九四三（昭和十八）年五月一日の創立記念日は、名古屋大学の開学式となりました。医学部学友会から寄付があつたこと、前年度に医・理・工の三学部が揃い、かつ工学部が第一回卒業生をだしたことなどの理由によります。洪沢個人としては、おそらく名古屋帝国大学が一応大学としてある程度の軌道に乗つたという、安堵感があつたかもしれません。それほど、この戦時中に大学を立ち上げ軌道に乗せるには、多くの課題がありました。そこでつぎの第二・三章で、その名古屋帝国大学初期の課題を、洪沢の総長としての仕事とともにみていきたいと思ひます。

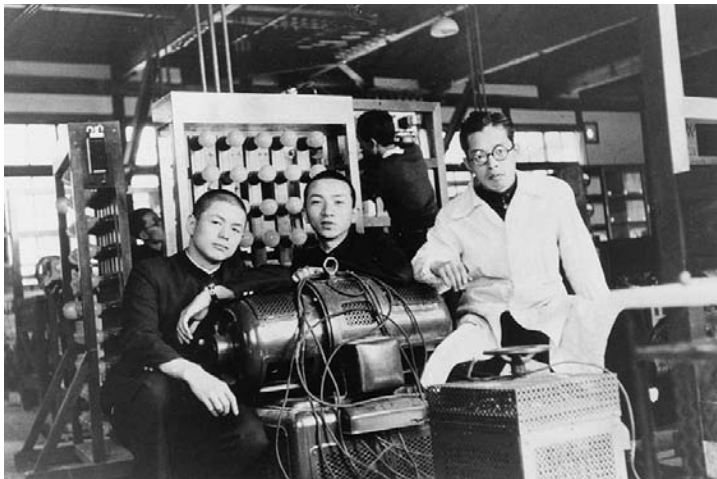
## 《コラム》整流器ベルトローある数学者の夢

整流器とは、交流電流を直流になおす装置です。ベルトロー (Verloro) は、変換・転換器を意味する英語 (インバーターなど) の語尾「バーター」をエスペラント読みして、発明者の椎尾詞 (しいおひとし) が名づけました。

椎尾は、名古屋大学の前身校のひとつ第八高等学校 (八高) 在学中、交流モーターで直流発電機を回して市電用の直流を作っているのを見て、もつと効率のよい整流器の開発をこころざしました。東京帝国大学理学部数学科在学中の一九一八 (大正七) 年に特許出願し (二年後に許可)、母校八高に赴任してから十数年にわたって私財をつぎこみ実用化をはかりました。一九三六 (昭和一一) 年、地元メーカーによる製品化が軌道に乗った矢先に四十一歳で死去しました。椎尾は「正しいと思い、良いと思ったことは、その時、その場で行え」をモットーに、二進法やエスペラント語、ローマ字の普及、学校給食や奨学金の実現にも努力しました。「八高数学」の伝統を築いたリベラルな教育者としても評価されています。

ベルトローは、以後一九六八 (昭和四三) 年まで海外向けを含め計七千五百四十五台が出荷され、金属メッキ、電池充電、放送局の真空管や映写ランプの電源などに広く利用されました。





【図5】現在博物館にあるベルトオーロ(上)と戦前の西二葉町校舎にあったベルトオーロ(下、石岡繁雄氏提供)

上は名古屋大学工学部電気系で学生実験で使用されてきたもので、名古屋帝国大学創設当時に使われた機種(下)と同じく下部に油槽をもつ油冷式であり、ベルトオーロのごく初期の型です。

海外特許も取得するなど、当時としては優秀な器械でした。なお、名古屋大学工学部では戦後まもなく、ベルトローロの回転部分から出る放電火花を減らすための改良研究が行われたようです（近藤守信氏の私信によります）。

（名古屋大学博物館・西川輝昭）